ふるさと探訪

第一部・猿橋物語

〈17〉

鉄砲水の危機超す

54年の台風20号 記録的集中豪雨

〈余話〉桂川の流れ

〝昭和の橋〟架け替えが動き出していた五十四年十月。名勝・猿橋に流失の危機があった。紀伊半島に上陸した台風二十号が日本列島を縦断、各地に記録的な集中豪雨をもたらした。桂川上流に降った雨は〝鉄砲水〟となって押し寄せた。川幅が極端に狭くなる地形も手伝って、渓谷の水かさはみるみる増し、激流が高さ三十㍍の猿橋に迫った。

先人たちが残してくれた貴重な財産をついに流してしまうかと、工事関係者らも一時は肝を冷やした。が、谷間のてっぺんに橋脚もなしに建てられた奇橋のおかげで、かろうじて流失を免れた。

「五十年も猿橋を見てきたが、あんな〝鉄砲水〟はあまり記憶がありません」。大黒屋旅館のおばあちゃん佐藤栄子さん(七〇)が当時を振りかえる。それもそのはずで、近年は「桂川の水が減った」というのが地元の偽らざる実感だった。

橋の北側で、昭和十八年から開業している歯科医渥山兵太さん(七〇)。カメラが好きで、おりおりの猿橋を撮り続けてきた。二十年ほど前、初夏のスナップが県の写真コンクールで三席に入選したことがある。

「もうひと昔前の話ですが、アメリカの観光案内に〝モンキーブリッジ〟とありましてね。これは捨てたものじゃないと、急に猿橋が大きく見えました。でも、当時は桂川の水はもっと豊かだったなあ」

渓流に小舟を浮かべて、観光客がアユ釣りを楽しんだり、灯ろう流しをしたりした風情はもう見られない。

桂川本流の水は、上流の都留市川茂で東電が、明治四十年から発電用として毎秒二十五㍑取水している。だから猿橋あたりを流れるのは、途中で合流する葛野(かずの)川の水といってよい。ところが、その水が近年急激に枯れてきたという。

かつて葛野の架け替えの時、豊富なケヤキ材を出した葛野川上流の小金沢山一帯も、戦時中の乱伐がたたって見るカゲもない。さらに沿岸の都市化が進んで、降れば〝鉄砲水〟、あとはカラカラ。これは開発に伴う裏腹の現象なのだ。

その川に生きる桂川漁協(西宰覚組合長)。六月のアユ解禁に備えて稚アユの放流などに忙しいが、関係者は「水量が少ないせいか、ヤマベなどは食いが悪いと不評を買う。それに最近は、家庭排水などで水の汚れも目立ってきた。困ったものです」と嘆く。

猿橋の下を流れる桂川。そこにも時代の波は容赦なく押し寄せる。

小舟が浮かぶ桂川渓谷。水も豊富だった。明治に架けた猿橋がかすむ